

令和元年度 第1回直方市総合教育会議次第

1. 開会及び閉会に関する事項

(1) 日 時 令和元年11月12日(火曜日)

開 会 15時30分

閉 会 16時50分

(2) 場 所 直方市役所 5階 第503・504会議室

2. 出席者及び欠席委員の氏名

(1) 出席者

直 方 市 長 大塚進弘

直方市教育長 山本栄司

直方市教育委員 山内 健

直方市教育委員 中村敬子

直方市教育委員 澁谷昌樹

直方市教育委員 中野昭子

(2) 欠席者

なし

3. 会議に出席した者の氏名

(1) 事務局

総合政策部長 大場 亨

教 育 部 長 安永由美子

市政戦略室長 坂田 剛

教育総務課長 熊井康之

学校教育課長 川原国章

こども育成課長 塩田礼子

文化・スポーツ推進課長 古賀 淳

学校教育課管理主事 大塚泰信

戦略室担当係長 鏡 隆之

(2) 書 記

教育総務係長 船越健児

4. 会議式次第

○教育総務課長（熊井康之）

定刻になりましたので、ただいまより令和元年度第1回直方市総合教育会議を開会いたします。

まず、本総合会議と教育大綱について、説明させていただきます。

地方公共団体の長は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第一条の三に則り、教育基本法第十七条第一項に規定する基本的な方針を参酌し、地域の実情に応じ、地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を定めるものとなっております。

また、大綱を定める場合、地方公共団体の長は総合教育会議を設置し、教育委員会の教育委員及び教育長と十分な協議を行うこととなっております。

なお、本日の会議は、直方市総合教育会議運営要綱に則り進めさせていただきます。

それでは、大塚市長より御挨拶いただきます。よろしくお願いいたします。

○直方市長（大塚進弘）

改めまして、皆さんこんにちは。本日は、教育委員会に引き続いての総合教育会議ということで、教育長、教育委員の皆様には、非常にお忙しい中御参加いただきましてまことにありがとうございます。

私は、4月の選挙を通じてさまざまな形で私の思いや政策を訴えてまいりました。青年会議所OB等に主催していただいた公開討論会では、この地域の学力問題もテーマの一つでございましたけれども、しっかりとした基礎的な学力を子どもたちに付与して、将来の生きる力のベースをつくっていくことが極めて大事だろうという話をいたしました。

議会では、直方市を初めとするこの筑豊地域の負の連鎖といわれるものを何とか断ち切っていくといけないといけない。これは非常に時間のかかる課題ですが、我々がここで取り組まないとこの連鎖を断ち切ることができないのではないか。その連鎖を断ち切るためには、私は子どもが小さいうちにしっかりと生活の基礎的な習慣を付与することと合わせて、質の高い幼児教育を受けってもらうことが大事だと思っております。

そのことがひいては小学校、また、中学校での課題を少なくしていくことにもつながるのではないかとの思いで、選挙戦でも訴えてまいりました。

平成28年、前市長時代に、さまざまな議論がなされた結果として、「無限」という一つのシンボリックな言葉とともに、地球は遊び場、学び場という捉え方で大綱が定められています。

私自身が理解力に欠けているのかもしれませんが、それが教育施策とどういうふうに関係しているかがよくわからないところです。

教育大綱というのは、市民の皆様方に示す以上は、しっかりとわかりやすいものでないといけないのではないかと。崇高な理念は理念としながらも、それが市民の皆様方、教育関係者、さまざまな方々が共通の理解として持ち得るようなものとして、わかりやすい言葉に置きかえていくことが必要だろうとの思いがございます。

崇高な理論のもとにつくられた前の大綱を無視するつもりはございませんが、教育大綱をもう少し施策に落としやすいような形に持っていきたいと思っております。

私どもが目指す教育環境を整備しながら、この地域に住んでよかったと思えるようなまちづくりをやっていきたい。このことは重要な柱だと思っており、皆様方に御参集いただき、総合教育会議を開催したところでございますので、活発な議論をよろしくお願いいたします。

○教育総務課長（熊井康之）

続きまして、教育委員会を代表して山本教育長から御挨拶いただきます。

○教育長（山本栄司）

まず、大塚市長におかれましては、直方市の教育大綱の策定に当たりまして、教育委員会との協議の場である総合教育会議を招集、開催いただきましてまことにありがとうございます。

今、市長のお話の中にもございましたが、この教育大綱というものは、教育の目標やそれに向かっている施策の根本的な方針、これを形としてあらわすものと捉えておるところでございます。

最終的には、市長が策定されるというものですが、それに向け教育委員会と協議、調整を尽くすのがこの会議の場と思っております。

また、市長もおっしゃったように、どういう立場、どういう人が見ても直方市がどういう教育、どういう子どもの育成を図ろうとしているのか、これを見たら簡単にわかるというものを目指してつくっていかなければならないと考えておるところでございます。そういう大綱の作成に向けまして、各委員の御協力をいただければ幸いですと思っております。お手数をおかけしますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

○教育総務課長（熊井康之）

それでは、議事に入りますが、直方市総合教育会議運営要綱第4条3項の規定により、会議の議長を大塚市長にお願いいたします。

○直方市長（大塚進弘）

それでは、要綱に則りまして私が議長を務めさせていただきます。

今回の総合教育会議では、先ほど私が申し上げましたように、わかりやすい教育大綱を新たに教育委員の皆様とともに作り上げていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

早速、レジュメに沿って進めてまいります。会議の時間は1時間半程度ということで、5時を目途に会議を閉じたいと思いますので、御協力よろしくお願いいたします。

まず、大綱策定に当たりましてのスケジュールについて、事務局より説明をお願いします。

○教育総務課長（熊井康之）

会議のスケジュールについてですが、会議は3回開催したいと考えております。

本日、第1回の総合教育会議では、スケジュールと大綱の構成について、確認していただきたいと思っております。

また、お手元に大綱と基本方針の参考資料を置いておりますが、内容は、学校教育を中心とした部分、社会学習、生涯学習を中心とした部分、就学前教育の部分に分かれております。

その中で、本日は学校教育部分についても議論していただきたいと考えております。

2回目の会議は、12月16日月曜日に予定しております。ここでは、本日の会議結果の確認と、生涯学習の部分、就学前教育の部分について議論いただきたいと考えております。

3回目の会議は、1月17日に予定しております。ここでは、原案をお示しして、表記等をあわせたところで意見をいただきたいと考えております。

来年にはいりますと、教育委員会は、次年度の具体的な施策を策定する時期に入るため、大綱、基本方針については、3回目の会議でほぼ確定するように進めてさせていただきたいと思っております。

必要ということであれば、2月12日の定例教育委員会後に第4回の総合教育会議を開催させていただきたいと思っております。

○直方市長（大塚進弘）

ただいま、事務局よりスケジュールの説明がございました。来年度の2月ごろを目途に大綱を策定いたしまして、それに基づいて具体的な教育施策を

つくり、次年度からは現場でしっかりと実践していこうというスケジュールでございます。

短い期間で、時間的にも限られておりますけれども、これまで教育委員の皆様方も教育委員会の運営について御尽力いただいていることもあり、大きくぶれることもなく議論が進むのではないかと考えております。

このスケジュールについて何か御意見等ございましたらお願いします。

※意見なし

○直方市長（大塚進弘）

御了承いただいたということで、議事を進めてまいります。

次に大綱の構成について確認をしていきたいと考えております。事務局より説明をお願いします。

○教育総務課長（熊井康之）

大綱の構成について説明いたします。

まず、これが最終的に市報で公開された前回の教育大綱です。シンプルに文字で示した形になっております。参考にされたのが武雄市の教育大綱で、これも「組む」という文字で示されたシンプルな形となっております。

改定に当たっては、奈良市の形態のように、テーマがあり、その後に大綱がきて、大綱の後に基本方針が幾つか並ぶという形ではどうかと考えております。ご検討よろしく願いいたします。

○直方市長（大塚進弘）

事務局より、大綱の構成についての説明がございました。

大きなテーマはまだ入っておりませんが、それを決めた上で、教育、人材育成から学校関係、生涯学習や学術など7項ぐらいの基本方針をたてた形で提示してもらっております。

最初に大きなテーマ、前回のように「無限」という言葉をシンボリックに提示する形をとるのか、もう少しわかりやすく、「未来志向の教育」ということで、さまざまな社会の変化といったことを捉えて、かみ砕いたような形にするのか、こういうフレーズみたいなものでどうだろうかといったさまざまな意見があろうかと思えます。

前回の無限という言葉にとらわれず、ある意味では子どもたちは当然無限の可能性をもっておりますので、そのことも踏まえたうえで、どういうテーマが望ましいのか御意見をお出しいただきたいと思います。

○教育長（山本栄司）

前は「無限」というテーマを、教育委員の方々からもいろいろ御意見をいただきながらつくられたと思います。

今回、これから直方市が目指して教育の方針、方向性を決めていくなかで、どのようなものを目指すのか、どういうものに力を入れるのかといったことの御意見をいただく中で、それが単語一文字であらわせるものであればそれもよし、そうじゃなくてやはり少し文章文言になってくるかなというものであればそういうもので、はなから一つの単語に決めてしまおうという形よりも、いろいろ意見を出してもらって中で形が出てくるものなのかなという気がしております。

とは言いながらも、形を決めずに理想、理念ばかり出し合っている活字になっていけないので、まず単語になるのか文章になるのかわかりませんが大きなテーマを掲げ、その下に基本的な方針を挙げていき、その後は、毎年作成する施策においていきますので、そういう形態を確認いただいて、その後いろいろと御意見をいただいていく中で、大きなテーマの扱いをどうするかということを決めていけばいいのではないかと思います。

○直方市長（大塚進弘）

教育長から、テーマからおろしていくのではなく、基本方針から積み上げて全体をくくった形を最終的に言葉にまとめたかどうかという逆のアプローチのほうが議論しやすいのではないかと提案がありましたが、いかがでしょうか。

○中野委員

私も賛成です。

○直方市長（大塚進弘）

そういう意味では、事務局が整理している7項目ほどの基本方針でおおむねカバーできるのではないかと思います。基本方針について事務局より説明いただけますか。

○教育総務課長（熊井康之）

まず、未来志向の教育へという部分から説明いたします。産業構造が大きく変わっていく中で、大量生産社会のための知識詰め込み型の横並び教育では通用しなくなるため、知識活用型授業への転換を図る。先が見えない社会において、変化に対応し生き抜いていく力を育てる。また、個人の尊厳や

選択の自由など相互理解を尊重するためノーマイライゼーション理念の定着に努める。ひとり一人の社会的、職業的自立に向け必要な能力、態度の発展を促していく。としておりますが、これは、概要だけ添付しております国の第3期教育振興基本計画中で大事だと思われる個所を記載したところです。

未来をひらく教育の部分は、個人の可能性を最大限に引き出す、才能を伸ばす教育が一層求められ、これは幼児期からしっかり取り組む必要があるという内容です。

次の21世紀型スキルの獲得については、これも第3期教育振興基本計画からの抜粋ですが、記載しているスキル、力が、今後非常に重要になってくると、ICT環境を整備して授業に活用していくことも求められているという内容です。

例えば、ICTを活用して水族館、美術館、テレビ番組のディレクターなどと教室とをつなげて授業をすとか、外国人の方と英語だけの授業・異文化コミュニケーションを行うといったことも考えられます。

ここは、大塚管理主事から説明させていただきます。

○学校教育課管理主事（大塚泰信）

まず、ICT活用の例として、文部科学省の資料をご覧ください。御承知のとおり、新しい学習指導要領においては、何を学ぶかという視点が、どのように学ぶかという視点に転換されました。

そこで重要視されるのは、思考力、判断力などを育成するための学びのあり方であり、そこで、ICTの活用というのは非常に重要な地位を占めております。

各教科の指導でICTを活用することは子どもたちの学習に興味・関心を高め、わかりやすい授業や主体的、対話的で深い学びの実現、個々に応じた指導の充実に資するものとされています。

一斉学習、個別学習、協働学習とありますが、これは、具体的にどういうものかということ、別の資料を用いて説明させていただきます。

一例ではありますが、これから学校現場の教員と、ICTを活用してどのような授業ができるのかということ、人材育成の観点も合わせて議論していく必要があると思っております。

1つ目は、自ら疑問に思ったことをその場で調べる。これは調べ学習とい、コンピューター室などで行ってきたことを、教室及びその授業に必要な場所ですることができるようになります。

また、今度の教科書にはQRコードがついていて、これをカメラで撮ることによって動画が再生されたりする。このように、教室ではリアルタイムに

できなかったようなことについても、資料をコンピューター室に行ってみなければいけなかったことをその場でできる。これがこの間の整備で実現することが可能となってまいります。さらには、授業や自主学習で活用できるコンテンツが小学校、中学校の教科書会社からは供給されておりまして、そういうデジタル教材についても、教科書会社だけではなくいろいろな教育関係の資料提供する企業等から無料、もしくは有料で提供されておりまして、それを活用することによって先ほど申し上げました知識、技能の定着だけではなく、それを活用するためのアイデアを得ることができるというのもございます。

2番目です。動画のすごさや学習したことを自分で確認する。先ほどと関係するところでもありますが、例えば動画を見ながら自分でやり方を確認できる作業などが教科書会社ではあります。例えば、そこにはコンパスの使い方という例示があります。学校のほうで教師がコンパスの使い方を教えた。でも1回では覚えきれない児童生徒、この場合は児童になりますけれども、復習の意味も含めて自分で調べて動画を見ながら確認することができるサイトでございます。

3番目です。実験や観察、調査に活用して結果について写真や動画などを入れながらまとめると、よくある紙ベースで報告するようなケースは今までもございましたが、実際のところ仮説に基づいてこれは実験したものを動画などで撮影して、こういうふうに具体的に動くんだよと、こういうふうに流れる。これは水の流れを示したものですけれども、そういうものを検証して報告するなど、自らこういうふうな状態になるのではないかという予想を立てて、それを実証して報告すると、こういうふうな授業を実現することができますし、さらには自分でつくったものについて、これをみんなに報告するというふうなところが、下のほうです。これは家庭科の調理でつくったものを撮影し、それに関しても自分の考えなどを載せてレポートする。これは今デジタルカメラとかを使ってやっている学校はありますけれども、これを教室で、その場でできるという利点があります。

4点目です。他の学校の児童生徒と交流授業や専門家と遠隔授業をできるということで、例えばA小学校とB小学校が離れたところで合同のテーマにおいてディスカッションしたい、もしくはかなり離れた遠隔地、例えば海外の学校とも交流を行うことも可能です。こういうふうな授業を行うこともできます。

最後です。プログラミング学習。プログラミング学習の根本的な考え方は論理的思考を身につけるための一つの手だてでございます。とはいえ、プログラムを組むということは、それを目で見ながらその順序性というのをきち

んと確認しながら、どういうふうな動きをとることができるかという検証を行うためのいい素材であります。ですので、ソフトを使ってその動きを実際に見せてみる、遠隔操作では、下の表にあるのはスクラッチという、これはフリーで使えるプログラミングのソフトでありますけれども、それをiPhoneに転送して、それに基づいて動かせるような機械もございます。これは一例です。さまざまな機械が出ていますけれども、遠隔で行うことによって何が問題だったかというのを考えて、プログラム、重要性などについて検証することができる。これはあくまでも一例です。実際のところ、教育現場においてはさまざまな可能性があって、多くのソフトが開発されております。これにつきましては、この大綱が整備された以降、研究するものとして計画を立てて進めてまいりたいと思っております。以上です。

○教育総務課長（熊井康之）

基本方針2です。今後こういうふうに変わっていくことになるだろうという部分について説明させていただきました。管理主事からもありましたけれども、教育現場の変化への対応、また、ベテラン教員の知識・経験の伝承といますか、そういった人材育成も重要という部分になります。

基本方針の3です。地域連携による学校支援、コミュニティ・スクールの推進の部分です。交通安全活動をはじめ、地域の方にいろいろとご協力いただいていると思いますが、さらなる協力とPTA活動の参加を促していくひとつがあること。部活の指導員の確保、文化活動についても同様かと思えます。教員等の支援として、学校現場での事務等の負担を減らしていくということも考えられるところです。

コミュニティ・スクールとともに、放課後子ども総合プラン、学童保育に関係する部分です。近所に遊ぶ子どもがいないことや、子どもが家に一人で居るのはちょっと危ない考える保護者が増えております。放課後の居場所づくりという意味もあわせて、コミュニティ・スクールを考えていく必要があるのではないかとということで、記載いたしております。以上でございます。

○直方市長（大塚進弘）

スケジュールで言いましたように、今回、大綱の全体のテーマについては積み上げるとして、学校教育部門を今日の会議の主題として進めたいと思っております。事務局より、基本方針の1から3まで、こういう課題があってそれに対してこのように基本方針を設定したらどうかという提案がございました。委員の皆様方から、ここが抜け落ちているのでこういう方針に変更し

たほうがいいのか、その他のアイデアを含めて御意見がございましたらお願いいたします。

学校現場も新しく外国語教育だとかプログラミング教育といったさまざまな変化がおきておりますし、世の中全体をみても、国も Society 5.0 ということも進めようとしております。

産業界では5Gだとかさまざまな変化が起きておりますが、少なくともICT技術がどんどん進歩し、AIをはじめ、いろいろな技術を現場に導入できないかと言われておる中で、学校教育に限っては三つの大きなテーマがあるのではないかということでした。

一つは、コミュニティ・スクールのような地域連携の話だろうと思っております。

また、将来の子どもたちに、先ほど私が申し上げた基礎的な部分、土台ができていないとその後がなかなか積み上げられないということで、しっかりと土台をつくったうえに、今やタブレットを使ってアクティブラーニングといったことが盛んに言われておりますが、応用力や自ら考えていく力といった能力をどう付与していくかという話が必要だろうと思っております。

そういった意味で、事務局からは、未来をひらく教育にまとめるような話、あるいは21世紀の人材育成というようなこと、それから基本方針の3として地域連携による学校支援といったまとめ方の提案がっておりますので、忌憚のない御意見をお出しいただければと思います。

○山内委員

市長が言われることとずれるかもしれませんが、前回の教育大綱の策定にかかわっていないところもありますけれども、教育大綱といったときの教育の捉え方について整理する必要があると思っております。

全体を見ていくと、学校教育にかなり凝縮されていると感じます。教育委員会管轄の教育は、0歳、生まれてから幼児教育、それから学校教育、学校を出ても将来的に学び続けられる環境づくりとか、そういうところがとても重要だと思います。

そうすると、大綱を決めるときに、0から死ぬまでという表現は悪いですが、そういう守備範囲の中でつくろうと思うのか、とにかく重要課題である学校教育に焦点化して大綱をつくろうと限定していくのか、どちらのスタンスで話をしていくのかを整理する必要があると思っております。

全国の市町村でもさまざまあるようですが、事務局が苦勞してつくってくれた資料を見たときに、学校教育にある程度比重が置かれたものになっているとように感じるようです。一方で、見ると生涯学習が入ってきているし、

どちらのスタンスでお話をするのが望ましいのか。私の個人的な意見としては、生涯学習という視点の中で、就学前の子どもたち、あるいは家庭など、どんなところに力点をおいて取り組んでいくのか、学校教育の重点はここなんだと、あるいは生涯学習の学ぶ機会を市民の皆様に提供していく場づくりをしていこうと。そういうふうに分けた大きく三つのステージの中で大綱を考えていくほうが、後々、施策としていく上でも生かしやすいのではないかという気がいたします。

○直方市長（大塚進弘）

今言われましたように、私も生涯学習は大事で、親が学び続けることが非常に重要だと思っており、就学前教育も合わせて生涯学習も非常に大きな柱だと思います。そういう意味では、守備範囲は0から最後までであり、どうやって学び続けられる地域社会をつくっていくかということ、そこに私どもが方針を示して、施策もそれを裏打ちした形で展開していくことが大事だと思っております。今日は先ほどのスケジュールにありましたように、学校教育というところを最初に議論しましょうかということで、先ほどの3点があって、生涯学習や幼児教育というのは、次回以降のテーマとしてしっかりと議論を進め、トータルとしての大綱をつくりたいというのが私自身の思いでもあります。

○教育総務課長（熊井康之）

お手元の資料の説明を最後まで進めさせていただきます。市長の考えは今言われたとおり、生涯学習、また就学前教育についてもしっかり力を入れるべきということでございます。本日は、事務局の力不足でその部分についての具体的な方針まで示すことはできておりませんが、最後まで説明させていただきます。

4番目は、食教育について記載しております。ある自治体では、小学生の3割の子どもに将来的に慢性疾患を患えよう兆候があることが、血液検査によりわかったということです。

健康、食や体づくり、スポーツも非常に重要なテーマですし、スポーツ推進計画を推進していくことも求められております。

今後は、健常者、障がい者、性別などを超えた総合スポーツの推進とスポーツ団体の育成についても力を入れていく必要があるということで、基本方針4で挙げております。

生涯学習社会については、いつでもどこでも学び続けることができる地域づくりの重要性は、市長、山内委員が言われるとおりでございます。親が学

び続けることができる仕組みづくり、就業やキャリアアップとの連携まで見据えて進めていく必要があるのではないかとこのところでございます。

また、社会教育、特に基本的な生活習慣、健康づくりなどについては、親世代の教育が欠かせないところです。福岡県は朝御飯を食べる子どもの割合が全国で最も低いそうです。こういった部分は、PTAと連携した取り組みも求められるのではないかと思います。

近年、大きな問題になっておりますSNSによるトラブル、情報モラルなども、親と一緒に考えていく課題として挙げております。

児童虐待についても大きな問題となっておりますが、子どもが安心できる家庭づくりという視点も必要ではないかということで、生涯学習、社会教育の重要性について、テーマとして掲げております。

基本方針6、就学前教育の充実です。教育基本法には、乳幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期であるということがうたわれております。非認知能力というのが幼児教育で特に注目されておまして、それをこの時期にしっかり身につけさせることが、将来の学力の伸びにもつながってくるというような研究結果もございます。また、子どもの課題が大きくなる前にしっかり取り組みをするほうが、就学後の対応の困難度が下がる面もあるかと思います。そのためには、親の教育、支援も必要となりますので、幼稚園、保育園、認定こども園と家庭、支援機関との連携体制づくりにも取り組んでいく必要があるということで、記載しております。

最後に、基本方針7、文化・学術の振興について挙げております。事務局も、教育大綱は全体をとらえてつくる必要があるとの認識を持っておりますが、まず、学校教育部分から始めてはどうかということで提案させていただきました。以上です。

○直方市長（大塚進弘）

事務局より説明がございましたが、山内委員、どうでしょうか。

○山内委員

話が元に戻ってしまいそうで心配なのですが、大もとの方針があつての具体的なので、最初から基本方針の話をしてしまうと、話がしにくくなってしまいます。こういう大きな目標があるから、ここではこんな具体的なことをやりましょうという話の進め方のほうが考えやすいのではないかなと思います。

○直方市長（大塚進弘）

議論の仕方ですね。課題はいろいろありますけれども、これを解決するためにこういう方針を立ててグルーピングしましょうというやり方では、全体をまとめる展開が難しいということですかね。

○山内委員

こんな方向に持っていきましょう。だからこうやりましょうという方が考えやすいのではないかというのが私の思いです。

○澁谷委員

ある程度、方向性やテーマがあったほうがまとめやすいのではないかなとは思っています。

○直方市長（大塚進弘）

今、事務局が説明した内容は、さまざまな課題をくくっていくとこんな基本方針になるのかなという話だと思います。

ただ、教育大綱で目指すべきはこういう感じなんだよねと、そして、そこに課題があって、そのギャップを埋めるための施策が繋がってこないといけないと思います。私が冒頭で申し上げたように、ギャップがあり過ぎて言っていることと施策がどうリンクしているのかわかりづらいようではいけませんので、山内委員が言われるように、直方市の教育大綱ではこういうことを目指していますと、それは人づくりなのか何なのか、どういう言葉で表すかはあるのでしょうかけれども、さまざまな施策を目標として掲げながら話をしていきましょうというやり方は確かにわかりづらいかと思えます。

まず、共通のこの方向を目指しましょうということをしつかり議論していないとなかなかテーマが決められない。

前回のように無限という言葉でいうと、何となく三者三様、それぞれ勝手な思いで無限という言葉の中に思いを込めることができ、施策にどうつながっていくのかがよく見えなくなってしまう。山内委員が言われるような形で議論をすすめるのであれば、直方市の教育大綱が目指すべき方向性、こういうことを目指しましょうという言葉のアイデアがあれば出していただいて、それを議論して、最終目標として定めていけばいいかと思えます。

私も福岡県のふくおか未来人財育成ビジョンを見てみました。Think globally, act locally と、どこか使い古されたような言葉ですがけれども、こういう言葉をもって国際的な視野をもち、地域で活躍する「人財」を社会全体で育む福岡県を目指していく。これが一つの目標として掲げられ、そのた

めに施策が展開してきているイメージになっています。そういう目指す方向性を、ある意味では大綱の一つのキャッチフレーズになるのだろうと思います。前回も各委員の皆様方は大変苦勞されて、いろんな議論をされた中で最終的に無限という言葉になっているようですが、ただ、私にとっては見えな世界でもあります。教育委員会の施策要綱を見たら、言葉はあるのだけでもその間がよくわからない。地球が遊ぶ場だとか学ぶ場とかいって、それが市民目線から見ると、施策とどこでどうつながって、なんだろうというのがちょっと私には見えなかった。そこはもう少しわかりやすい言葉にブレイクダウンして置きかえていかないと、教育委員会としても展開がしにくい話になってくるのではないかという思いでした。

その言葉を大事にするならするという議論であってもいいんですけども、わかりやすい目標、何を目指すのかというところを共通認識ができるのであれば、テーマを置きかえていってもいいかなとは思っています。

○教育長（山本栄司）

先ほど山内委員が言われたように、これからの直方の教育の方向性をどう持っていくべきかを議論していく中で、大きな最初のテーマ、その文言はこういう形にしましょうと、出しあっていたらいいかなと思います。

先ほどの質問の学校教育に絞り込むものなのかどうかという点は、絞込むのはよくないと思います。あくまで直方の学校教育がどうあるべきかの大綱じゃなくて、直方の教育がどうあるべきかだと思います。手元にある資料の文科省の定義でも、大綱は地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策についてということになっております。そうすると、学校教育だけに特化するようなものじゃなく、広く捉えていく必要があるのだろうと。ただ、市長が示されているように、全部どこからでも言ってくださいじゃ話が進まないの、まず学校教育のところから議論していく中で、だんだん広げていくというやり方でいいのかなと。方向性は、今のやりとりで見えてきた気がしますので、意見を出していただければいいのかなと思っております。

○山内委員

前提としては、教育を広く捉えて、市民の皆さんの姿として、どんな姿を望むのか、市民にとってどうなのかというスタンスで議論していくということですね。

○教育長（山本栄司）

そして市長も言われていたように、いずれこの大綱が施策におりていくこととなりますので、大綱であまり細かな項目立てをしておく、今基本方針が七つ挙がっていますけれども、あの項目が足りない、この項目が足りないということになりかねません。それからいくと、基本方針を挙げていくというのはいいのですが、ここにはかなり狭いくくりのものになっているので、もうちょっと幅の広い、直方はこういうことを目指していこうという方針を五つぐらいに絞ったほうがいいですね。

○澁谷委員

資料の4ページ、第2部、今後5年間の教育施策の目標と施策群、これの基本的な方針は五つになっています。この基本的な方針から入って詰めていけば、大まかな方向が出てくるのではないかなと思います。

○直方市長（大塚進弘）

これは、教育大綱をつくる際に参酌しなさいと国が示している内容でしたよね。

○澁谷委員

これから入っていけば、直方はこういった方向で進めていこう、そしてそれを施策につなげていけばいいのではないのでしょうか。

○教育長（山本栄司）

国の基本的な方針も五つで、それぞれ広い範囲でつくってありますね。生涯学習だけにしぼった方針など。

○山内委員

事務局が苦勞してつくってくれた資料のおかげでいろんな考え方が見えてくるわけで、いずれ具体的な話になったときにこれが生きてくることとなります。まず、細かいのは省いて、基本方針1、未来をひらく教育を実践するか、そういう形で方針としては挙げていけばいいのかなというふうに思います。問題は大きなテーマですよ。

○直方市長（大塚進弘）

ほかの委員の皆様方、何か御意見ございませんか。中村委員、何かございませんか。

○中村委員

私も大綱に携わるのは初めてで、どういう形でつくられていくのかということを押聴しておりましたけれども、皆さんの言葉を拾っていくならやっぱり変化という言葉が今多数出ていますが、社会も大きく変化していつている時代なので、そういうところに着眼していく必要があると思います。AIだったり、外国人の方々がたくさん入ってこられて学校の3分の1以上が外国人という学校もあるとのことですし。

○直方市長（大塚進弘）

直方市ですか。

○中村委員

直方市ではないですけども、そういうふうに日本も変化してきていて、直方でも外国人の方をたくさん目にしますよね。そのようななかで日本の文化を守っていくためには、どういうふうに変化していかないといけないとか、大きく変化する時代にそれに対して教育はどうかかわっていくのかといったことが、着眼点になっていくのかなというふうには思いました。

識字率も落ちているそうですが、ITが進む中でもそういう基本的なところが疎かになっているところもありますので、どう変化してそういう基礎力も上げながら、また先進的な文明についていくのかなど、幅広いことを見据えながら見ていく時代になってきているのかなと感じております。

○教育長（山本栄司）

変化と今言われましたが、本当にそうだろうと思います。変化していくのはもう間違いない。これから教育をどうやっていくかとなったとき、変化することを見据えて、未来をどう見据えてやっていくかというそこをやっていかないといけない。

こんなことを言ったら失礼とは思いますが、今までの直方市がやってきた教育は、どちらかというところ今こうだからこう対応するということが中心でした。直方だけではなく他も同じなのでしょうが、先を見据えてこう変わりそうだからその先を打つぞというような変化をしていかないと、先ほどプレゼンで出してもらったああいう授業、あの先に行くことになりますので。もっと変わっていくということを見据えて、今の教育を受けた子どもたちが社会に出るころの社会はまた変わるから、そういう社会に対応できるような子どもたちを育成する。そういう先を見据えた未来志向の教育に直方は変えてい

く必要があるのだろうとっていて、そこにこれから力を入れ込んでいきたい。

そういったことを今度の大綱の中にも、未来的な思考ということは入れ込んでもらいたいというのが自分の一番の希望です。それがどういう言葉になって出てくるかわかりません。未来ということなのか、クリエイティブということになってくるのか、変化ということが出てくるのかわかりません。

ある本に書かれてあったのですが、これから先の世の中は、今までの世の中の延長線にはもうないのですよと、今の社会が進んできた延長線上の未来ではなく、よその世界に行くのだよと。学校教育でいくと、まずはそこかなと私は思っておりまして、そういったことを入れ込んでいきたいなど。

○中野委員

学校教育の話ということで、つけ加えますと、次年度から約10年ぶりに学習指導要領が改定されるということを知っています。

その三つの柱の一つが知識・技能、二つ目が思考力・判断力・表現力等、三つ目が学びに向かう力と人間関係等ということで、今からの学校のあり方というか子どもたちに学んでほしいことは、子どもたちがみずから課題を見つけ、学び考え実行する力を養っていかなければいけないということです。今、教育長がおっしゃったように、知識はパソコンを開いたら覚える必要がない時代になってきて、携帯を開けばおのずと知りたいことは出てくる。なので、それをどう利用して、自身が成長していくに従って、それをほかの人のために人類のために役立てることができるような人間を育てていくというか、子どもたちにそれだけの理念とか哲学を教えることが大事になるかなと思っています。そういうこともテーマの中に織り込みながら、市民の皆さん誰が見てもわかりやすい表現でつくっていくのがいいかなと思っています。

○直方市長（大塚進弘）

ただ、子どもたちのほうが、例えばタブレットを持たせたら親以上に早くなじんでいろんな使い道を見出すような気がします。親の世代よりはるかに速いスピードになれていくことになる世界。ただ、それは使い道がわかっただけじゃないという話で言うと、やはり国とか社会全体が求めているのはクリエイティブにつくっていく人を求めている話ではあると思っていますので、ベースとして何か必要なものがありそうな気がしております。そこだけを重点的にやっては、いい社会が生まれず、子どもたちが育たないのではないかなと思っています。

○山内委員

やはり、家庭教育とか学校教育で、基礎や基本、土台のところをしっかりとつくってやって、それがベースになって想像力だとか、あるいは変化に対応していく力だとかというのは育っていく、そういう環境づくりというのが直方市にとっては必要だろうと思います。もう一回やり直したい、もう一回勉強したいよねと思っても、自分は高校しかでなかったけど働きながらちょっと勉強したいよねといったときに、直方市でこんな講座がありますよとかこんなところで学べますよというようなものを提供していく。それでひとり一人の市民の持っている潜在力とか力を伸ばしていくことが、直方市にプラスになって返ってくるというようなところが大事なんだろうと思います。

○直方市長（大塚進弘）

事務局からも話がありましたように、私も日本の社会は終身雇用で一回レールを外れるとなかなか軌道修正が難しかったのが、徐々に変わりつつあるなと思っています。その中では学び続ける、もしくはもう一回チャレンジしようと思えばできる社会に、生涯、勉強するいろいろな機会を持つことが大切だと思っています。所得の向上もなかなかうまくいかない中でいうと、新しい職につけるような、もう一回トライできるようなことをしっかりサポートしてやらないと、結果的にそれが子どもたちに負の影響を与えるとかいうことを避ける意味でも、やっていく必要があるのだろうと思っています。

そういう意味では、いろいろいただいた意見も含めて、教育環境をどういう言葉で結ぶかにしても、少なくとも世の中が変わって社会環境そのものが大きく変わりつつあることだけは共通の認識とし、その中でどうこれに対応していくか。直方特有の問題みたいなものも多分あるのだろうと思いますが、5年、10年先、長期的にクリアできるような方向性を出して、施策に落とし込みながら展開していくことが必要だと思っています。

○教育長（山本栄司）

今、市長が言われたような直方のこれから先、未来の教育を考えていくときに、先を見るばかりじゃなく、負の連鎖というのをどう切っていくかというのは大きな課題だろうなと思います。直方というところは、対処療法的な取り組みを考えるというよりも先々を見越した力をいかにつけてやっていく

か、そこを変えていかないと結局その連鎖がまた始まってしまうというか、市が育っていかないことにつながっていくのかなという感じがいたします。

先々に対応できる力をいかにつけてやるかということは見据えてやる必要がありますが、未来だけ見ていたらいいということでもないと思います。

それを教育の中では不易と流行と言ったりするのですが、そういう視点も必要なんですよ。

○直方市長（大塚進弘）

能力のある人を伸ばすということも重要です。それが将来的に社会全体を大きく変革させ、利益をもたらすことになります。一方で、特に行政としては、SDG s の考え方にもあるように、だれも取り残さないという役割もあります。そのバランスをとるのが難しいと思います。学校教育の中で集団教育をやっていると、どのレベルに水準をあわせて先生たちが教えていくか。一人で30人とか40人とかになっていくと、どこかで抜け落ちていくところと物足りないというところが絶対出てくるはずで、そこを今のICTなどを使って個別の進路に応じた対応とかができるようになる。できている子と、できていない子の間をしっかりと埋めるというか、それを先生一人でもやれる社会ができてくると、それはそれで望ましい教育現場に近づき、先生にも、子どもたちにとっても幸せな環境ができてくるのかなという思いがあります。我々の立ち位置としては、伸びる子は伸ばさないといけないし、スピードの違いをしっかりとわきまえた上で、子どもたちに最適な環境をつかって提供してやるというのが求められている気がいたします。

○中村委員

その差が広がると下の子たちの自尊心は育ってこないと思います。なので、一人一人が自分は生きていていいんだという、学校に行ってもいいんだと思える、一人一人が楽しめる集団生活ができるような場づくりが必要だと思います。今、不登校の子どもがとても多くなっていますが、学校がそのようになれば、ハンデを持った子どもたちも行きやすくなるんじゃないかなと思います。

○直方市長（大塚進弘）

ひょっとしたら、できる子ができない子を教えて、そこの中でのコミュニケーションで人間関係ができていく現場があってもいいかもしれない、社会として見捨てていってはいけない話だと思います。それぞれにいろいろな能力があって、そこをしっかりと全体で要する社会の縮図みたいなものと考え

たら、教育の現場の中でも同じではないでしょうか。これから先多くの外国人の方が市の学校現場に入ってくるかもしれない。言葉がなかなか通じない、コミュニケーションがうまくいかない人たちとどう一緒になってやっていくかとなったときに、コンピューターがあって、それぞれ個別の対応だけでスキルを上げていけばいいというだけでは機能しないかもしれない、まさに先ほどのコミュニケーション力じゃないですが、別の考え方のアプローチも必要だと思ったりもします。

だから、先生の負担を軽くしながらも、子どもたちがしっかりと将来の社会を構成する一員として、障害を持った子であってもしっかりと社会を構成する一員になっていくための環境をつくることが望ましいと思います。

○中村委員

そう思います。

○中野委員

そのとおりだと思います。一人も置き去りにしない学校のあり方というか、そういう考え方が基本になってくると思うし、大事になると思います。市長もおっしゃったように、クラスメート間で話し合いながら答えを導き出していくような授業が次年度から推進されていくというのも聞いています。そういうところで、自分の意見を人にわかりやすく話ができるといった力もつけさせていって、何のために勉強するかということも子どもたちがしっかりと認識したら、みんなが勉強に向かっていくと思います。そこを褒めて、励ましながら、先生たちが子どもたちを育てていったらと思っております。

親御さんも、子どもが家に帰ってきて、今日何をしたのか、学校でどういうことがあったのかということ、親子関係の中で話ができる、コミュニケーションができるような家庭を築いていただいたら、とてもいい方向に行くと思います。そういうことも含めたテーマづくりをやっていったら、皆さんが共感できるかなと思います。

○直方市長（大塚進弘）

そういう意味では、基本方針3にある地域連携による学校支援といった話もだいじになるか思います。先日、PTAの九州大会が、おやじから高めようというようなキャッチフレーズで開催されました。今学校を支える側で言うと、保護者の皆さんがオール参加している話でもなくて、参加しない人たちこそひょっとしたら課題を抱えておられて、そこのアプローチどうやるんだという話が出てきていそうな感じはいたします。目指すべきは、親も学校

を支える側であり、また、家庭の中にもしっかりと子育ての知識、自覚みたいなものをもってもらうかということだと思います。なかなか行政はアプローチが難しい。幼児教育が無償化になったからと言って、そういったことを理解していない親がいたら、ただでも行かせないということすらあり得るかもしれません。幼稚園や保育園にしっかりと通わせることで、親もそこから学んでもらって、変わってもらえればいいのでしょうかけれども。そのことも一つの目標として掲げながらも、施策として展開するときにはいろんな考え方というか、方策を講じないと底上げもなかなか難しいかなと思ったりします。

○中野委員

今のところでいうと、乳幼児健診というのはとても大事な事業だと思います。連れていっていない親御さんもいらっしゃって、その方たちをどうフォローするかというのは、その後の就学の問題から家庭環境の問題から全てにつながってくるところだと思います。乳幼児健診に連れていっていないお子さんが不登校になられたという事案に私自身もかかわっていますので。

○中村委員

昨日、教育委員の研修でコミュニティ・スクールの話がありましたが、つながるとい言葉が何度も出てきて気になっていたところですが、いろんな人がつながって行って、そこからいろんな変化が生まれてくる。そういうイメージがあるといいなというふうには思いますね。ただ、つながりをつくるというのが何をつくるのか。でも行政だけにはもう頼れないと思いますし、なので、市民を巻き込んでみんながつながって変化していくみたいなイメージがあるとすごく豊かな感じがするなと感じます。

○直方市長（大塚進弘）

澁谷委員、どうぞ。

○澁谷委員

方向性がわからなくなっていました。話の方向性が。

○山内委員

たくさんのキーワードが出てきました。キーワード、変化とか基礎力とか創造性とか可能性とか。それを、こういう大人にというか、こういう直方市の市民に育ててほしいよねという願いの文言にはまとめられる可能性はある

のではないのでしょうか。そこを突き詰めていけば、話は見えてくると思います。

○教育長（山本栄司）

最初は学校教育で話し合っていましたけど、幼児教育や生涯学習、社会教育についての話も出てまいりました。やはり、全部出てくるんですね。

○中村委員

つながっていますからね。

○山内委員

全部つながっていますね。後々は全部つながってくるので、こんな直方市民になるためには、幼児教育はこんなことが大事だよ、学校教育はこういうことが大事だよ、という根源の話ができると思いますね。

○中村委員

そうですね。

○教育長（山本栄司）

未来にこだわるわけではないのですが、未来的なとしていったときに、これからやっぱりコミュニケーション力、人間関係づくりというか、その力は教育でつけていく必要があると思います。これからの世の中は、それができにくい時代でしょうから、あえてそういう指導をすることが必要になってくるでしょう。

○中野委員

大事だと思います。

○中村委員

本当に大事だと思います。今の子どもたちは、みんなずっとゲームをしているのですよ。みんなで集まっているのに、ピコピコとゲームをして、話していないですからね。だからこそ教育の現場で、コミュニケーションをとるような仕掛けをしてもらわないと、社会に出たときにどうやってコミュニケーションをとるのだろうか。

○教育長（山本栄司）

これから地域コミュニティというものさえ必要なくなるのかといたらそうはいかないと思います。最悪いずれそうなるにしても、そこまでいくにはという部分もあるでしょうから、コミュニティの力が弱くなっていくように、そういった育成能力が社会にも学校にもなくなってくるため、そこはあえて意識して教育していくという必要は出てくると感じましたね。

○中村委員

とても大事だと思いますよ。自尊心を高めながら。

○直方市長（大塚進弘）

前段で申し上げたように、全体をカバーするという事は共通の目標とします。事務局が提案した基本方針3ぐらいまでの学校教育という視点から見ても、そのことがいろんなところにつながっていますので、全体の議論の中に学校教育の位置づけをどうするかという話になろうかと思ひますので、いろいろいただいた言葉を踏まえて、どういうくくりで方針にしたほうがいいのかということ。また、先ほど山内委員が言われたように、それは直方市民全体のありようを教育という観点からどういうふうに目指すかという大きなテーマになってくるだろうと思ひますけれども、そのことも、今いただいた意見を踏まえて事務局で整理して、次回、御議論いただくような形にしたいと思ひています。

今日は、初めての会議ということもあって、事務局から説明を受けて、基本方針も含めて資料も配られておりますが、最終的には、それらを踏まえて冒頭に私が申し上げたような形のできるだけわかりやすい、そして教育委員会として要綱の中でしっかりと施策展開ができるという形に持ち込めればいいかなと思ひています。そうすることで、市民も自分たちの大綱としてしっかりと認識できる。

今の教育大綱は、市民みんなが共有できる話になっているかということ、これではなかなか市民のものとなっていないのではないかという思ひがありますので、ホームページを含めてですけれども公開して、私どもがつくった教育大綱なるものは市民にしっかりと、どこにアクセスしたらしっかりと見られると、こういう方針に基づいて直方市は施策展開をやっているんだということがわかるようにしておかないといけないと思ひていますので、そういうところまで行き着きたいなと思ひています。

ぜひ、そういう意味では、前回に負けない直方市の教育大綱なるものを市民に提示していきたいなと思ひておりますので、委員の皆様方には引き続き

よろしくお願ひしたいと思ひます。冒頭、事務局が示したとおり、1月で終わらなければ2月も議論するというスケジュールの中で、令和2年度にはしっかりと大綱に基づいた施策の展開をしていきたいという思ひでござひます。

また、今日の議論を踏まえてわからないことがあれば、事務局なりにお尋ねいただき、次回の議論も実りあるものとしていきたいと思ひておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

○教育総務課長（熊井康之）

それでは、本日の議論はここで終わらせていただきまして、12月16日、次回の総合教育会議を開催させていただきたいと思ひます。

それまでに、今の意見を踏まえてたたき台をつくり直し、教育委員会で調整させてもらった上で提示するようにいたします。

それでは、以上で令和元年度第1回教育総合会議を閉会させていただきます。

上記のとおり直方市教育委員会会議規則第13条及び第14条の規定により会議録を作成した。

直方市長

大塚 進弘